

答 辞

頬を伝わる風が和らぎ、日ごとに暖かな春の日差しを感じられる良き日に、私たち八十八名は卒業の日を迎えることができました。

本日は、堀内学長をはじめとする諸先生方にこのような式を挙げていただき、卒業生一同、心より御礼申し上げます。

思い越せば四年前、看護の道を進むことを決意し、新たな環境での生活や仲間との出会いに、期待と不安を抱いて佐久大学に入学しました。あれから四年という月日は瞬く間に過ぎていきました。入学当初は新型コロナウイルス感染症の流行により、思い描いていた大学生活が予期せぬ状況で開始しました。何もかもが初めてであり、分からないことが多い中で開始したオンライン授業では、学内紹介やインターネット環境の調整をしていただき、私たちの不安を和らげてくださいました。徐々に大学に通えるようになり、対面での授業や友人に会えることに喜びやありがたさを痛感いたしました。日々課せられる課題、医学や看護学の深さ、実習の忙しさに追われ、逃げ出したくなる時もありました。しかし、先生方や多くの関係者の皆様の熱心なご指導や温かい支えがあり、幾多の困難を乗り越えることができました。こうした恵まれた環境の中で過ごした四年間は、大変有意義で貴重な時間であり、看護の道を歩む上での確かな土台、そして忘れられない思い出となりました。

一年次には、コミュニケーション技法や形態機能学を学び、看護は疾患のみではなく、対象者を生活者として捉えるという、看護を行う上での基本を学びました。学年が上がるごとに専門科目の学修が多くを占め、疾患への知識が増え、喜びを感じるとともに、初めてのEBN実習では、疾患から離れることなく、患者様を生活者として捉えるという「全人的ケア」の難しさを痛感しました。

三年次後半より始まった実習でも、新型コロナウイルス感染症の流行は影響を与え、急遽、臨地実習から学内実習に変更されることもありました。五感を使って看護を学びたく、臨地実習ができないことに悔しさを感じることもありました。しかし、そのような中、実習場所の違いによる知識や経験の優劣が付かぬよう、先生方の工夫された熱心なご指導と御多忙の中、実習を受け入れてくださった病院、スタッフの皆様、患者様のご協力により実りある実習をすることができましたこと、感謝の念に堪えません。そして、共に悩み支え合った仲間は、実習を始めとする大学生活においてかけがえのない存在です。実習を通し、不安や緊張を感じ、夜中まで看護記録に追われる日々辛さを感じたこともありました。しかし、患者様は疾患を患ったその時から、様々な辛さと向き合い、闘っているということに気づきました。患者様の人生を豊かにするため、意思や強みを捉え、それを傍で支えることで持つ力を引き出し、可能性を広げることに看護職としての役目があることを学び、「相手を思いやり、寄り添う看護」の大切さを実感しました。三年次の実習は、患者様との関わりから、これまで漠然としていた看護観が具体化され、これから看護職として従事する上で礎となると確信しております。

また、今年の初めに「能登半島地震」が発生しました。行方不明者や負傷者の報道を耳にしても直接的な力になれないことに不甲斐なさを感じ、心が痛みました。被災者の中には共に看護師国家試験を受験する学生が存在し、受験日まで残り一か月の状況での災害により心身の健康が脅かされたことは計り知れません。近年、災害が多発する中で看護職としてどのような行動をとるべきなのか、役割と責任を考える機会となりました。

私たちはこれから、佐久大学で学び過ごした四年間の思いを胸に、それぞれ新たな一歩を踏み出します。時に辛く、挫けそうになることもあると思います。そのような時には、初心を忘れず、相手とも自分とも真摯に向き合い、看護職として、また一人の人間としても成長できるよう、日々精進していくことをここに誓います。

まだまだ未熟な私たちですので、卒業後もこれまでと同様、皆様のご指導ご鞭撻を賜わりますよう、心からお願い申し上げます。最後に、今日までご指導下さった諸先生方、豊かな大学生活が送れるようご支援いただきました職員の皆様、そしてどのような時も近くで見守り支えてくれた家族、友人に、心より感謝いたします。本日もご出席の皆様の、今後ますますのご健康とご多幸、佐久大学のより一層の発展を心より祈念し、答辞とさせていただきます。

令和6年 3月15日

佐久大学 看護学部看護学科

第13回卒業生代表

高山 みなみ